—広　告—

KIT
キャンパス
レポート 295
文・杉村裕之

能登半島地震の被災地へ。ボランティアとふるさと愛。

中野 祐三（なかの ゆうぞう）
金沢工業大学
バイオ・化学部
応用化学科四年
富山県立富山東高等学校出身

ＫＩＴの全学生で構成する学友会は、充実した大学生活を送るために設けられた学生組織団体だ。その学友会で、中野さんは奉仕活動の企画、運営を担う「学生地域活動推進委員会」委員長を務める。

今年発生した能登半島地震では、学内に災害ボランティアを呼びかけた。八月末までで七回を数え、中野さんらは倒壊した家屋から家財道具の運び出しや、土砂、倒木の撤去に汗を流した。

「初めの頃は道路状況が悪く、往復に八時間かかりました。現地の惨状は目を覆うばかりで、被災者の悲しみに胸が詰まりました」。どこから手をつけていいか分からないほどの現場に無力感を感じながらも、「ありがとう」と住民がかけてくれた五文字の重さと深さをかみしめ身体に刻んだ。

五月のボランティアでは、仮設住宅の玄関にかける表札づくりを手伝った。入居者の希望に応じて表札にイラストや絵を描いたり、色を塗ったりする作業だった。「不思議な体験でした。それまで無表情に見えた仮設住宅が、表札がかかった瞬間、命の色を帯びたように輝き出しました」。

とにかく笑顔の絶えない中野さんである。少し声を出して笑うと目が線になる。学友会担当の職員の話では、裏表のない温厚な人柄が、委員長を盛り立てていこうとメンバーが結束する空気感をつくり出しているそうだ。

取材の際、ふるさと自慢も尽きなかった。「夕日に染まる雪の立山連峰の美しさといったらありません」「名産のおぼろ昆布がうまいんです。ご飯にのせたり、すまし汁にしたり、アパートでもよく食べます」。休日、実家へ帰れば、友人と富山湾で釣りをし、温泉につかってリフレッシュする時間が至福だと、さらに目は細くなるのだった。

就活で内々定を得たのも富山県内の企業で、ホースと継手の製造で国内トップシェアを誇る。現在、雨を玉のように弾く植物の葉から抽出したワックス成分を、モルタルの撥水加工に活用できないか卒業研究を進めており、就職先の製品開発でもぜひ役立てたいと力がこもる。

東京への過度な一極集中が続く日本で、彼のような若者は少数派かもしれない。しかし、ふるさとを愛し、地域の課題を自分事で捉えられる人材の量で、日本再生の成否は決まる。ＫＩＴが地方にあるからこそできる教育の可能性と使命の大きさを、中野さんの行動と笑顔を通して再認識した。

金沢工業大学
石川県野々市市扇が丘七-一
電話番号（〇七六）二四八-二〇〇